

秋田県における古代火葬墓の分布と変遷

高橋和成*

1 はじめに

秋田県における火葬墓についての研究は、現在までそれほど多くの蓄積があるわけではない。それは火葬墓の発見のされ方が偶発的であったため、出土状況などの記録が保存されることなく消滅してしまうことに起因している。それでも『秋田県の考古学』(奈良・豊島1967)には7遺跡、『秋田県史－考古編一』(秋田県1977)には6遺跡の火葬墓が記載されており、当時の最大限の情報が集成されている。

このような状況の中、庄内昭男は火葬墓の新資料を加えた7遺跡を紹介し、埋葬状況や骨蔵器を分析することから古代・中世の火葬墓へアプローチしている(庄内1984)。庄内によると、火葬墓は骨蔵器よりわずかに大きい土坑を掘り、木炭を敷き詰めて骨蔵器を安置している。また、骨蔵器の分析により9世紀前半から10世紀前半までの年代観を示した。

沼山源喜治は北東北の古代・中世墓を集成している(沼山1985)。沼山は火葬墓及び土葬墓について東北地方、主に青森・岩手・秋田の3県を整理し、古代、古代～中世、中世の各時期の特徴をまとめている。火葬墓では墳丘・内部主体・骨蔵器・副葬品という視点から分析を行い、東北地方における古墳から火葬墓への移行は奈良末期～平安初期頃に推定している。また、平安時代における葬法は主に土師器・須恵器を骨蔵器として利用した火葬であるが、そのほか土葬墓として明らかものが若干みられる、としている。

これら2つの論考以降、秋田県内の古代火葬墓について論じたものは見当たらない。それは、それぞれの火葬墓から抽出できるデータには限りがあり、それが限界に達しているためと考えられる。特に火葬墓は出土状況が不明なもの、若しくは消滅しているものが多く、そもそも情報量が少ない。これまでの火葬墓という小さな枠組みの中での分析・検討という手法だけではなく、新たな方法論を用いたアプローチが必要になってきていると考える。そこで、本稿では1980年代後半以降、増加した火葬墓の基礎的データをまとめること、そしてそのデータに基づいた新たな方法を生み出すこと(試論)を目的としたい。

2 古代火葬墓

遺跡名	埋葬状況	骨蔵器	遺物	時代	秋田県の考古学	秋田県史	庄内1984
1 南台火葬墓	墓坑に炭を敷き詰めて埋納	土師器短頸壺 須恵器壺	角製櫛破片	9c後～10c前	●	—	●
2 大郷守火葬墓	詳細不明	土師器壺		9c前	—	—	●
3 北野火葬墓	詳細不明	土師器壺、須恵器短頸壺		9c後～10c前	●	●	●
4 潟向火葬墓	墓坑に炭を敷き詰めて埋納	土師器 須恵器		9c後～10c前	—	—	●
5 秋田城跡 神屋敷地区	墓坑に土師器壺を埋納	土師器壺5個 1つには「佛」の墨書有		9世紀後半	●	●	—
6 保土森火葬墓	詳細不明	須恵器長頸壺		9c後	●	●	●
7 岩土山火葬墓	自然の窪地に炭を敷き詰め埋納	土師器壺十鉢(蓋)		9c後～10c前	●	●	●

表1 研究史にみる火葬墓一覧

表1は古代火葬墓の一覧であり、図1の番号と対応している(註1)。このうち1～7はこれまでの集成や論考で紹介されている。そのため本節では、それら以外の火葬墓についての立地・形態・骨蔵器・時期などを一部古代から中世に及ぶ資料を含め、整理し紹介したい。

*秋田県埋蔵文化財センター文化財主事

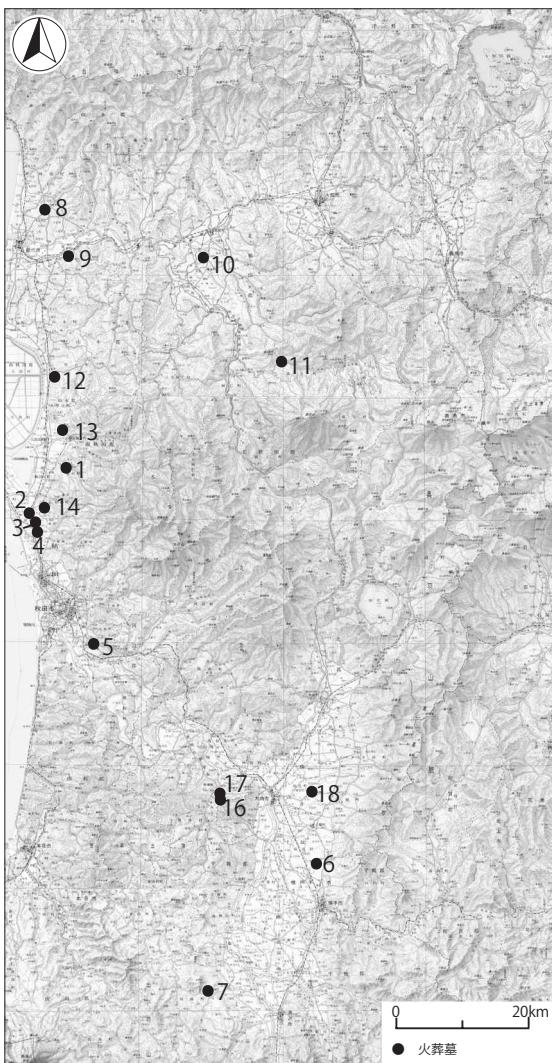


図1 秋田県における火葬墓の分布

8 外荒巻館跡（能代市教委2002、図6）

能代市外荒巻に所在し、米代川右岸の海成段丘面上に立地する。火葬墓は2基検出されており、平面プランが橿円形の土坑に骨蔵器を埋納している。遺構内堆積土には炭化物・焼土が含まれている。骨蔵器はいずれも土師器で、壺を合わせ口にしたものと、甕に壺を転用して蓋をしたものがある。骨蔵器内部には粉状になつた骨片が残存しており、科学分析の結果ヒトの骨が被熱を受けたものであると判明している。時期は出土した遺物から9世紀後半から10世紀前半と考えられる。

9 鴨巣I遺跡（秋田県教委2007、図9）

能代市田床内に所在し、太平山地に連なる幟山丘陵地の先端の中位段丘面に立地する。北2kmには米代川が西流している。火葬墓は2基見つかっており、いずれも隅丸方形の平面プランを持ち、規模・長軸方向なども類似している。一方のSK161からは土師器甕・壺が炭と骨片とともに出土している。もう一方のSK162からは土器や骨片は出土していないが、底面上には炭化物層が広がっている。出土した骨片の放射性炭素年代測定と他の遺構から出土している遺物から10世紀後半の年代が与えられる。

10 からむし岱I遺跡（秋田県教委2002、図8）

北秋田市鷹巣に所在し、米代川左岸の河岸段丘第5段丘面上に立地する。火葬墓は1基検出されており、平面形は不整橿円形に溝が直交する十字形を呈する。出土遺物は無く、形態は中世に多いタイプのため、報告書では中世の遺構としているが、放射性炭素年代測定によれば10世紀後半から11世紀前半を示している。また、遺跡内には中世の遺構は無く、古代の集落であることから火葬墓の時期も古代に含まれると考えられる。

11 地蔵岱遺跡（秋田県教委2008）

北秋田市森吉に所在し、米代川の支流である小又川中流域左岸の低位段丘面に立地する。火葬墓は31基検出されており、平面プランは不整橿円形もしくは不定形である。土坑内の堆積土には骨片と炭化物が含まれているが、いずれからも骨蔵器は出土していない。遺跡の遺構内外出土の遺物から古代末から中世初頭の集落であることから、火葬墓の時期も古代には收まりきらないが、古代から中世への過渡期の例として紹介しておきたい。

12 盤若台遺跡（秋田県教委2001）

三種町鹿渡に所在し、出羽丘陵北西部辺、旧八郎潟東岸の海成段丘上面に立地する。20基の火葬墓と5基の方形周溝墓（註2）が検出されている。火葬墓の平面プランは橿円に焚き口が付く十字形、円

形・楕円形、不整形の3つのタイプがあるが、いずれも骨蔵器は伴わない。遺構内の堆積土には人骨を含むものと含まないものがあり、含まないものには焼土が充填しており火葬場の可能性が高い。この火葬墓群は報告書での指摘の通り、隣接する方形周溝墓と関連した遺構と考えられる。時期は出土した中国陶磁器より12世紀末から13世紀前半であると考えられ、そのような遺物を持つことができた有力者の墓であるとしている。地蔵岱遺跡同様、古代末から中世への類例として紹介しておく。

13 開防遺跡（五城目町教委2002、図7）

南秋田郡五城目町に所在し、南方を流れる馬場目川の右岸の沖積低地、堆積作用による自然堤防上に立地する。火葬墓は3基検出されているが、そのうちの2基は掘り方が確認されていて25~30cm×30~40cmの楕円形墓坑である。骨蔵器には土師器が使用されており、埋納状況がわかるものは2つの壺を合わせ口にしたタイプである。この骨蔵器から9世紀第4四半期から10世紀前半という年代が考えられる。

14 松館遺跡（秋田県教委1991a）

秋田市金足に所在し、八郎潟に向かって張り出す丘陵地の先端の南に向かって小さく突出する舌状部分に立地する。名前の通り、当初は中世城館跡として調査を行ったが、堀切と見られていた北側の切り通しがトロッコ道と判明したなど、城館跡に関連した遺構・遺物は見つかっていない。そのような状況で火葬墓4基が検出されている。土坑状の掘り込み内から炭と骨片が見つかっているが、骨蔵器は無い。報告書では骨蔵器を持たないこと、土壙の形状が中世の火葬墓と類似していることなどから、火葬墓の年代を中世としているが、放射性炭素年代測定では古代を示していることから、ここで紹介しておく。

15 地蔵田A遺跡（秋田市教委1994、図5）

御所野台地の南側、上野台Ⅱ段丘面上に立地し、遺跡の約3km西側には雄物川が北西に向かって流れている。2基の土坑から焼けた人骨と炭が出土している。土坑の平面形はいずれも判然としていないが、60cm×30~40cmの範囲からの出土である。土坑内で火を焚いた痕跡はなく、土器も出土していない。報告書では中世の火葬墓と想定しているが、遺構外出土の第VII群とした土師器鉢は9世紀後半から10世紀としており、2基の火葬墓もこの時期の可能性が考えられる。

16 小出I遺跡（秋田県教委1991b、図2~4）

大仙市南外に所在し、樅岡川右岸の出羽丘陵高位段丘面に立地する。火葬墓は5基見つかっており、いずれも土坑内に土師器若しくは須恵器を骨蔵器として埋納し、炭を充填している。骨蔵器には壺を合わせ口にしたタイプ、甕・壺を倒立させるタイプ、壺に壺で蓋をするタイプがある。これらの土器から火葬墓の時期は10世紀前半頃と考えられる。

17 小出II遺跡（秋田県教委1991b）

大仙市南外地区に位置し、樅岡川右岸の出羽丘陵高位段丘面に立地する。盛り土からの出土であるため原位置を保ってはいないが、骨蔵器と考えられる土師器の小型甕と壺が炭と骨片とともに出土している。時期は小出I遺跡同様10世紀後半頃と考えられる。

18 払田柵跡（秋田県教委・払田柵跡調査事務所2005・2006）

大仙市払田・美郷町本堂城回に所在する城柵官衙遺跡である。遺跡は真山・長森の丘陵を中心として、北側を川口川・矢島川、南側を丸子川に挟まれた沖積低地に立地する。これまでの調査で古代の

火葬墓は真山地区から2基検出されている。そのうちの1基は125次調査で検出された。長軸105cm、短軸85cmの平面プランが方形の土坑に土師器長胴甕を骨蔵器として埋納している。この火葬墓の年代は土坑の掘り込み面が十和田a火山灰降下後であることや、土器の観察により10世紀代とされており、払田柵が機能していた時期の墓であると考えられる。もう1基は竪穴状遺構中から見つかっている。この遺構の床面直上には、全面に火を受け煤状炭化物が付着した礫があり、この下から骨片が出土している。さらに骨片の下には柱穴状の浅い掘り込みがあったが、遺物・骨片は出土していない。遺物が少なく詳細な時期は不明であるが遺構の掘り込み面から古代のものであると推定される。

以上が秋田県内における古代火葬墓をまとめたものであるが、以下でその特徴を整理してみる。

① 全ての墓が台地や丘陵上に立地する。

② 墓坑内には炭が敷き詰められることが多い。

火葬しているため、炭化物が含まれているのは当然であるが、南台火葬墓や潟向火葬墓の例のように、明らかに火葬場所とは異なる埋葬場所である墓坑内を炭で充填していることから、何らかの意味があると思われる。

③ 骨蔵器を持つ墓と持たない墓がある。

骨蔵器は壺を合わせ口にするタイプ、甕や壺に壺や鉢を転用して蓋をするタイプ、甕や壺を倒立させるタイプがある。骨蔵器を持たないものには、からむし岱遺跡、地蔵岱遺跡、盤若台遺跡、松館遺跡の4例あるが、からむし岱遺跡を除く3遺跡は古代末から中世の時期であることから、葬制としては骨蔵器を用いるものよりは後出のものと考えられる。

④ 墓坑には土坑状のものと焚き口を持つものがある。

ほとんどの墓は円形、楕円形、不整楕円形、不整形のいずれかの平面プランを持つ墓坑であるが、からむし岱遺跡や盤若台遺跡では焚き口が直交して十字形を呈するものがある。焚き口があるということは、すくなくとも火葬場であることが想定でき、他の埋葬場所としての火葬墓とは異なった性格を持つ可能性がある。また、払田柵跡から見つかっている竪穴状遺構内の火葬墓も形態としては類例が無く特殊なものである。

⑤ 同遺跡内に周溝墓が存在するものがある。

秋田県内では8世紀から10世紀頃まで築造された末期古墳（註3）の形状に多くみられる周溝墓が火葬墓に隣接している例がある。盤若台遺跡では5基の方形周溝墓が検出され、隣接する火葬墓には人骨が全く残っていないものもあり、埋葬場と火葬場という関係であった可能性が高いとされている（秋田県教委2001）。このような周溝墓と火葬墓との関係から、骨蔵器を持たない火葬墓は火葬場所であって、拾骨後は周溝墓のような別の埋葬場所に埋納されているケースも考えられる。同じく周溝墓が検出されている遺跡に、小出I遺跡、外荒巻館跡、開防遺跡などがある。

3 他の古代墓との関連

前節で火葬墓と周溝墓の関係について述べたが、火葬墓についての理解を深めるためには同時代の他の遺構との関連が非常に重要である。その手始めとして、火葬墓以外の古代墓をまとめてみたい。表2は払田柵跡調査事務所が提示している「秋田県古代・中世墓一覧」のデータベースから古代墓を抽出し、それを元に作成したものである。これによれば火葬墓以外の形態には大別して周溝墓と土坑

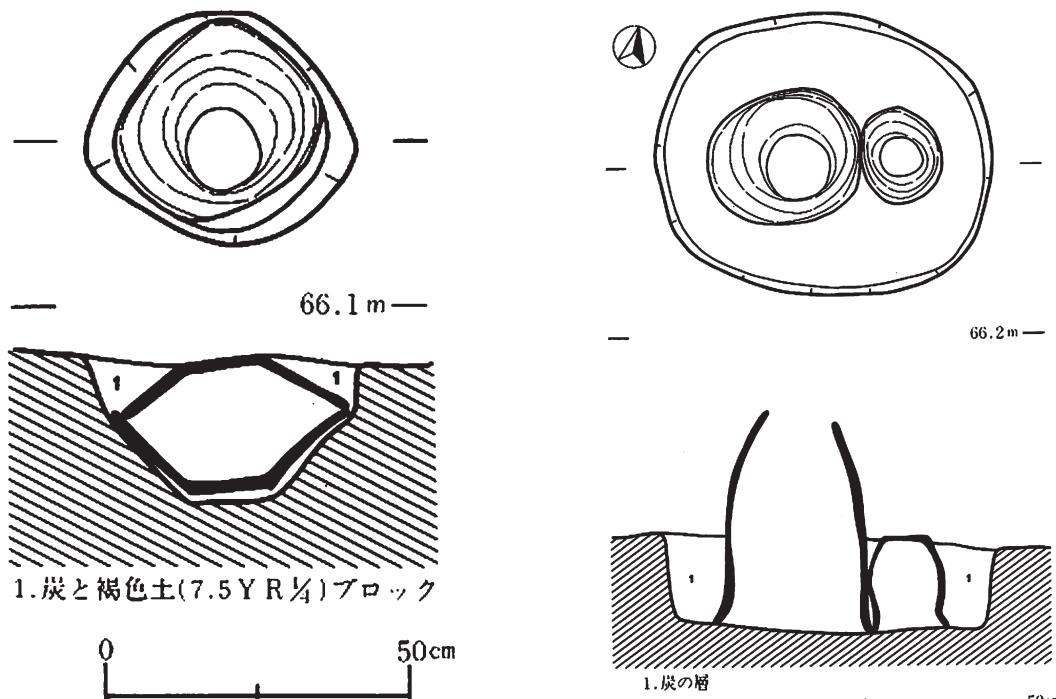


図2 小出I遺跡 火葬墓-1

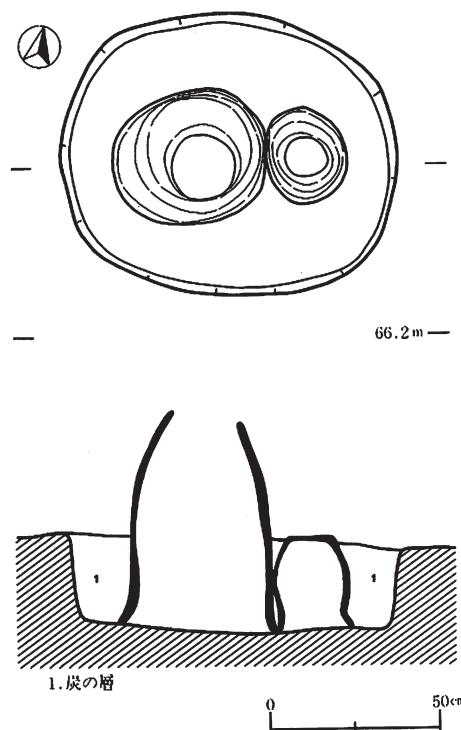


図3 小出I遺跡 火葬墓-2

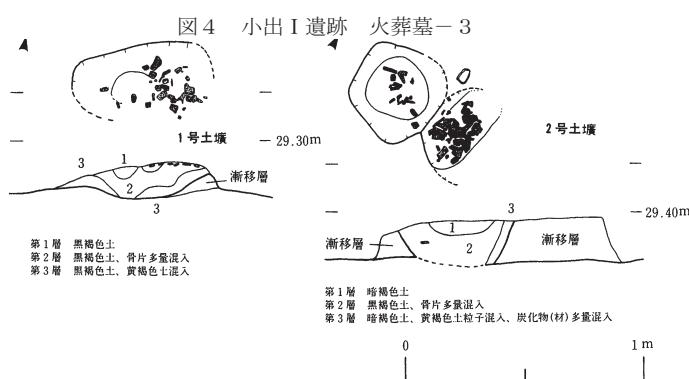
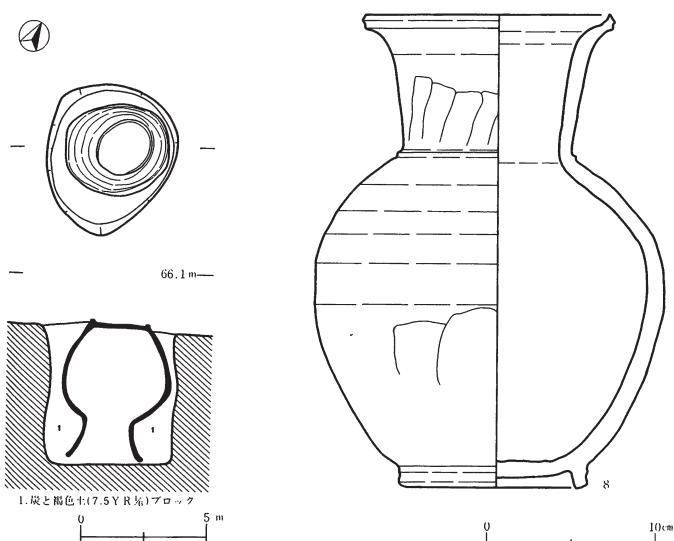


図5 地蔵田A遺跡 火葬墓

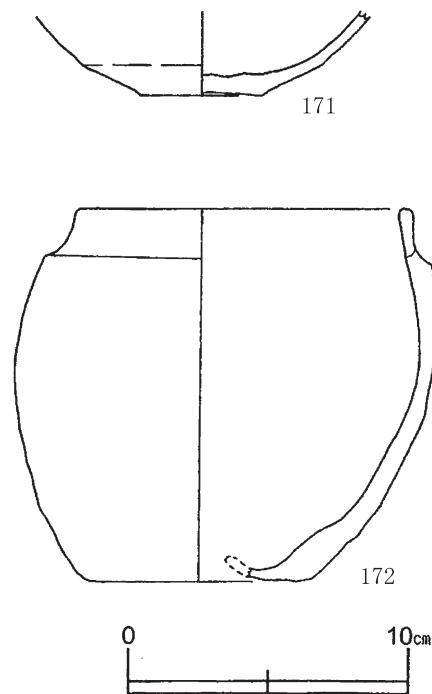
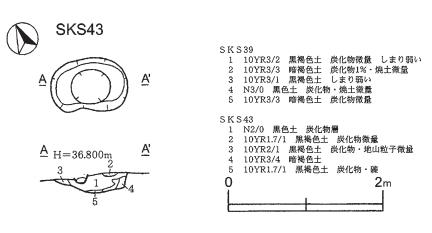


図6 外荒巻館跡 火葬墓

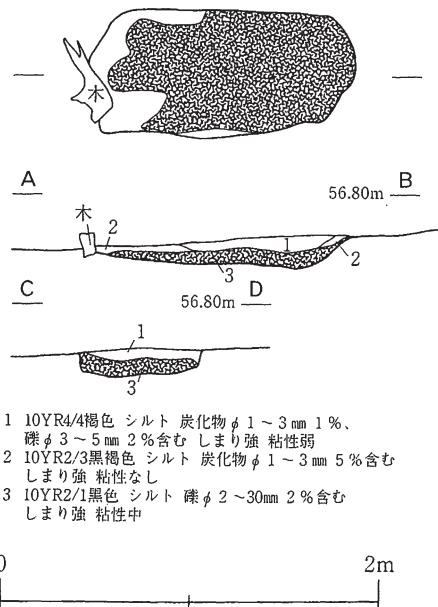
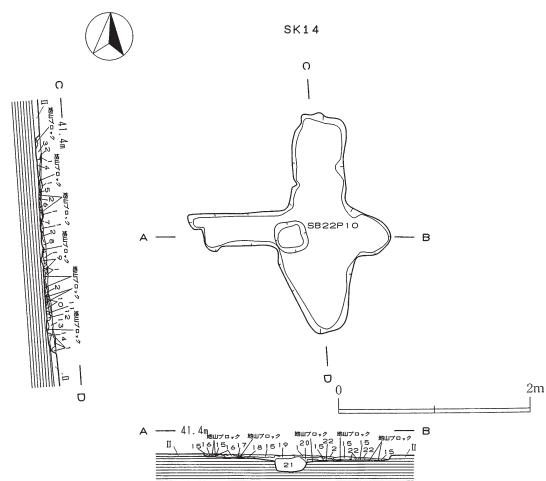
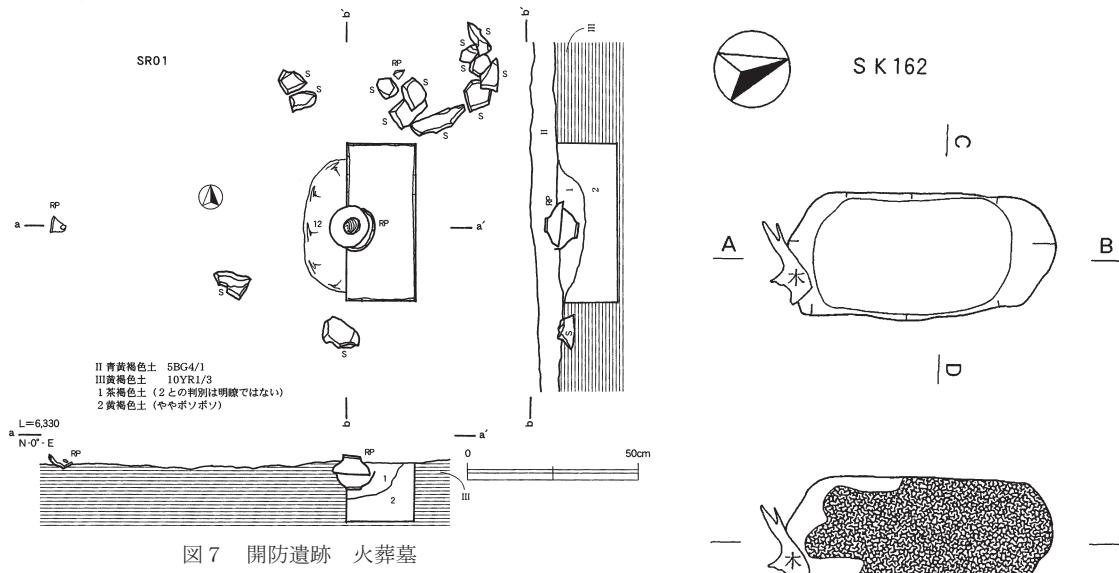


図10No.	遺跡名	所在	河川	立地	形態・数	副葬品・遺物	時代
1 5	秋田城跡	秋田市	雄物川	台地上	合わせ口甕棺・1基		9世紀後半
2 19	大湯環状列石F5区	鹿角市	大湯川	台地縁辺部	円形周溝墓・6基		10世紀前半
3 20	物見坂I遺跡	鹿角市	米代川	台地先端部	円形周溝墓・4基	蕨手刀、瑪瑙制耳飾・土師器	9~10世紀初頭
4 21	中の崎遺跡	鹿角市	米代川	段丘	合わせ口甕棺・1基		9世紀後半~10世紀代
5 22	加代館跡	能代市	米代川	大地上	集積土坑・2基		10世紀後半~末
6 23	杉沢台遺跡	能代市	竹生川	台地上	円形周溝墓・2基	土師器甕底部片	平安
7 24	ムサ岱遺跡	能代市	米代川	砂丘	土坑墓・1基	鉄刀	10世紀前半~中頃
8 25	西野遺跡	潟上市	八郎潟	台地上	円形周溝墓・1、方形周溝墓・1		9世紀前半
9 26	大沢杉遺跡	秋田市	岩見川	台地	円形周溝墓・3基		平安
10 27	湯ノ沢F遺跡	秋田市	岩見川	台地上	土坑墓・40基		9世紀後半~10世紀前半
11 28	前通遺跡	横手市	杉沢川	微高地	隅丸方形周溝墓・1基、土壙墓・3基		12世紀末~13世紀前半
12 29	手取清水遺跡	横手市	皿川、大戸川	扇状地	円形周溝墓5	遺構外より管玉2点	9~10世紀
13 30	オホン清水北遺跡	横手市	大戸川	沖積地	円形周溝墓・1基		平安
14 31	上猪岡遺跡	横手市	大戸川	丘陵斜面	円形周溝墓・1基、集石土坑・1基		10世紀前半
15 32	竹原窯跡	横手市	雄物川	独立丘陵斜面	集石土坑・3基		古代~中世

表2 秋田県古代墓一覧（火葬墓除く）

墓の2種類があり、周溝墓には円形・方形・隅丸方形などのタイプがある。土坑墓には土坑・合わせ口甕棺・集石などのタイプがある。また、ここで土坑墓としたものは副葬品の出土や立地・形状から墓である可能性が極めて高いものだけを挙げており、墓坑状を呈するが墓と断定できないものは除外している。遺物を持たない、いわゆる隠れ土坑墓は実際かなり多く存在すると考えられる。さらに、表3は秋田県内の末期古墳の一覧（小松2004）であり、これら古代墓の分布を示したものが図10である。

	図10No.	遺跡名	基数	造構	副葬品・遺物	時期
1	33	枯草坂古墳	3基	マウンド・石室か	勾玉他玉類、刀装具	詳細不明
2	34	三光塚古墳	1基	マウンド	勾玉他玉類	詳細不明
3	35	岩野山古墳群	30基以上	組合式木棺・周溝・墓坑	蕨手刀、直刀、馬具、石帶、勾玉他玉類、土師器、須恵器	8世紀後半～9世紀前半
4	36	新屋浜古墳	不明	組合式木棺	不明	不明
5	37	久保台古墳	不明	不明	蕨手刀、直刀、馬具、土師器、須恵器	8世紀～9世紀
6	38	小阿地古墳群	不明	周溝か	鏡、蕨手刀、直刀、斧・馬具、勾玉他玉類	8世紀後半～9世紀初頭
7	39	蝦夷塚古墳群	17基以上	周溝・墓坑・柵列	勾玉他玉類、鉄鎌、ガラス玉、土師器、須恵器	8世紀
8	40	柏原古墳群	64基以上	周溝・墓坑	土師器・須恵器・鉄製品	8世紀後半～9世紀代

※小松2004 一部改変

表3 秋田県末期古墳一覧

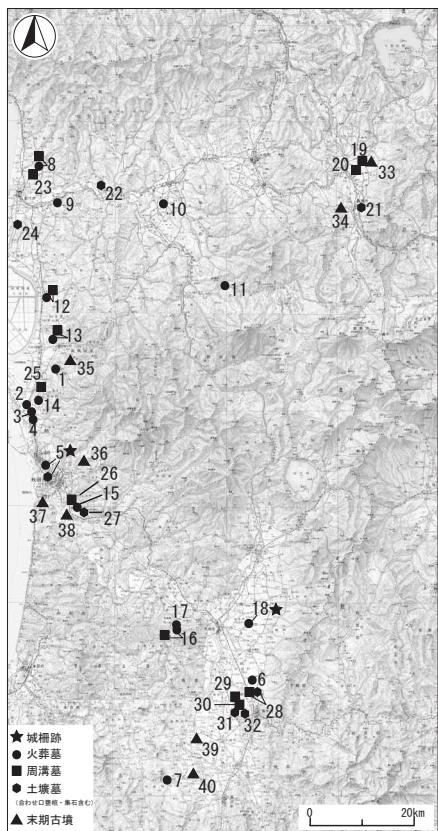


図10 古代墓の分布

No.	図10 対応	遺跡名	時期															
			8世紀 前	8世紀 中	8世紀 後	9世紀 前	9世紀 中	9世紀 後	10世紀 前	10世紀 中	10世紀 後	11世紀 前	11世紀 中	11世紀 後	12世紀 前	12世紀 中	12世紀 後	13世紀 前
1	1	南台火葬墓																
2	2	大郷守火葬墓																
3	3	北野火葬墓																
4	4	潟向火葬墓																
5	5	秋田城跡（神屋敷地区）																
6	6	保土森火葬墓																
7	7	岩土山火葬墓																
8	8	外荒巻館跡																
9	9	鶴巣I・II遺跡																
10	11	地蔵岱遺跡																
11	12	盤若台遺跡																
12	13	開防遺跡																
13	15	地蔵田A遺跡																
14	16	小出I遺跡																
15	18	払田柵跡（真山地区）																
16	19	大湯環状列石F5区																
17	20	物見坂I遺跡																
18	21	中の崎遺跡																
19	22	加代館跡																
20	24	ムサ岱遺跡																
21	25	西野遺跡																
22	27	湯ノ沢F遺跡																
23	28	前通遺跡																
24	31	上猪岡遺跡																
25	35	岩野山古墳群																
26	37	久保台古墳																
27	38	小阿地古墳群																
28	39	蝦夷塚古墳群																
29	40	柏原古墳群																

I期 II期 III期 IV期

表4 古代墓の変遷

この古代墓の分布を見ると、米代川流域（Aグループ）、雄物川下流と旧八郎潟沿岸部（Bグループ）、横手盆地（Cグループ）という3つのグループに分かれる（註4）。この分布は当然、集落遺跡の分布にも重なるものであるが、沿岸南部の由利・本荘地区に分布が見られないのが一つの特徴である。表4は古代墓の中で構築時期がある程度絞り込んでいる遺跡を示したものである。古代墓の構築時期は大きく4時期に分けることができ、第Ⅰ期（9世紀前半まで）、第Ⅱ期（9世紀後半～10世紀後半）、第Ⅲ期（11世紀前半～12世紀後半）、第Ⅳ期（12世紀末～13世紀前半）となる。これを時期別の分布であらわしたものが図11～13である（註5）。

第Ⅰ期は末期古墳が主体の時期であるが、火葬墓の初現である大郷守火葬墓や周溝墓の物見坂I遺跡・西野遺跡が後半に現れる。現在のところ秋田県における火葬導入はこの時期であり、第Ⅰ期の前半には秋田城が、後半には払田柵が成立している。第Ⅱ期は火葬墓が急増する時期であり、火葬がある一定の社会層に普及した時期であると考える。同時に周溝墓や土坑墓の数も増加しており、この時

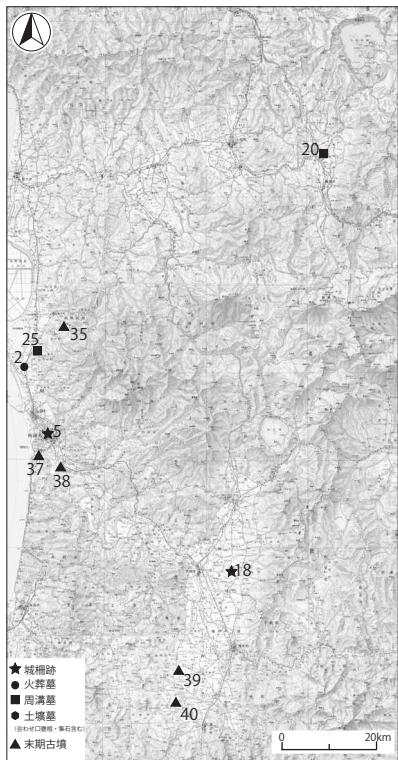


図11 古代墓の分布 第Ⅰ期

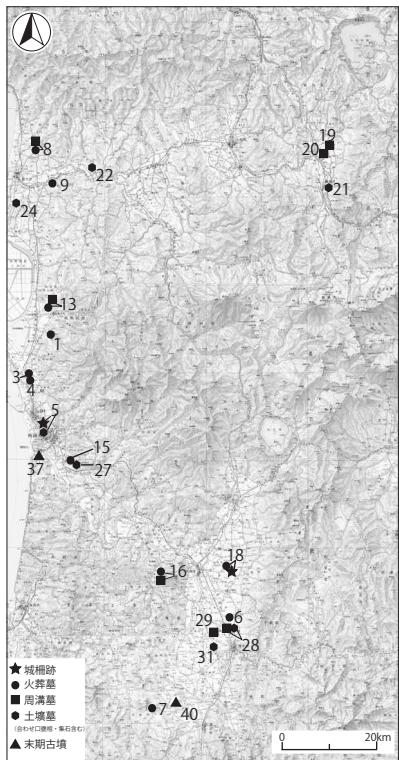


図12 古代墓の分布 第Ⅱ期

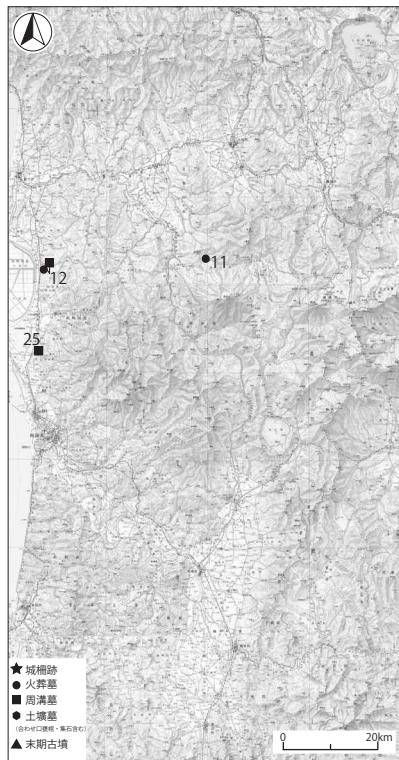


図13 古代墓の分布 第Ⅳ期

期の前半で築造が終わる末期古墳の墓構築手法や思想が周溝墓として受け継がれていると考えられる。第Ⅲ期は古代墓の数が激減する時期であり、時期が特定できているものでこの時期に入るものはない（註6）。いずれにせよこの時期の古代墓は相対的に少ないということが言える。第Ⅳ期は古代末から中世の過渡期の時期である。この時期に含まれる地蔵岱遺跡や盤若台遺跡は一遺跡における火葬墓の検出数が多く、それぞれ31基と20基である。この時期は骨蔵器を持たず、焚き口があることなどからも火葬場としての火葬墓も含まれていると考えられる。数が増加することや形態が変化していることなどから考えると、火葬がさらに広い社会層に広がった、若しくは葬制自体に何らかの変化があったということが想定される。そういう意味ではこの第Ⅳ期が火葬墓にとっての一つの転換期とすることができます。

4 まとめ

これまで秋田県内の古代火葬墓の特徴を抽出し、さらに同時代の墓を加え、分布と時期に注目し整理してきたが、ここで若干のまとめを行いたい。

火葬墓は台地や丘陵上に占地され、第Ⅱ期までは骨蔵器が用いられる場合が多く、これに焼骨を納め墓坑内に埋納される。この際に炭を意図的に充填している例が多い。数が激減する第Ⅲ期を経て第Ⅳ期になると一遺跡内の火葬墓の数量は増加する。骨蔵器は用いられずに墓坑内に埋納されるが、焚き口を持つタイプもあり、埋葬施設としての墓坑ではなく火葬施設としての土坑である遺構も含まれると考えられる。分布に注目すると第Ⅰ期では末期古墳を除けば、Bグループに集中していることが分かる。このグループには秋田城跡があり、火葬墓の導入・成立にはやはり律令制を通じた中央政府との関係の拠点である秋田城が大きく関わっている可能性が指摘できる。第Ⅱ期になると3グループ

の分布が顕著に現れ、古代墓の数も増加した。先述したようにこの時期に火葬墓が一定の社会層に普及したと考えられ、最初の転機であると言える。第Ⅲ期には何らかの理由により古代墓の数は減少している。第Ⅳ期に入ると火葬墓の形態に変化が見られることから、さらに広い社会層に火葬が普及したと推測し、もう一つの転機となる。

以上、古代火葬墓を中心に整理を進めてきたが、当初の目的であった基礎データの構築としてはそれなりに提示できたつもりである。また、今後の研究のためには分布論または、他の遺構を含めた総合的な分析が必要である、という方向性を示すことができたように思う。しかし、まだまだ表面的な分析であり、今回分布から分けた各グループ内での集落遺跡や遺物を含めた狭い範囲での分析、さらには文献を援用した検討など、今後の課題が鮮明となった。これらの課題を消化していくことで秋田県内の古代墓にアプローチしていきたいと考える。

【註】

【註1】図1及び図10～13は国土地理院発行の1：200,000地形図「秋田（平成6年）」、「弘前（平成17年）」、「新庄（平成5年）」を元に作成した。

【註2】報告書では、方形周溝としているが、墓である可能性が高いと考えられるため、ここでは方形周溝墓と表記する。

【註3】末期古墳とは北東北や北海道に分布する周溝を持つ小型の円墳である。「終末期古墳」または北海道では「北海道式古墳」など様々な名称があるが、本稿では「末期古墳」とする。

【註4】3つグループ分けを行ったが、Aグループの米代川上流域の鹿角地域と下流域の能代地域はグループとしては分けられると思われる。本稿ではグループ個別の詳しい分析までは至っていないため大別して3グループとした。今後の課題したい。

【註5】第Ⅲ期は遺跡の分布がみられないことから図示はしていない。また、第Ⅳ期は中世に入っているため、図示した以上の墓があるが、本稿では古代墓に絞っているため図示していない。中世墓へどのように移行していくのか、これも今後の課題したい。

【註6】からむし岱遺跡の火葬墓は放射性炭素年代測定によれば、第Ⅲ期に含まれるが集落としての時期は第Ⅱ期であり、不確定なためここでは除外した。

【参考文献】

秋田県1977『秋田県史－考古編－』

秋田県教育委員会1981『杉沢台遺跡・竹生遺跡発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第83集

秋田県教育委員会1982『東北縦貫自動車道発掘調査報告書V－上葛岡IV遺跡・駒林遺跡・案内II遺跡・猿ヶ平I遺跡－』

秋田県文化財調査報告書第91集

秋田県教育委員会1984『東北縦貫自動車道発掘調査報告書VII－柏木森遺跡・中の崎遺跡・明堂長根遺跡－』

秋田県文化財調査報告書第105集

秋田県教育委員会1987『大杉沢遺跡発掘調査－一般国道13号御所野拡幅事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書－』

秋田県文化財調査報告書第151集

秋田県教育委員会1990『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書V－手取清水遺跡－』秋田県文化財調査報告書第190集

秋田県教育委員会1991a『秋田外環状道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書I－大沢遺跡・松館遺跡－』

秋田県文化財調査報告書第204集

秋田県教育委員会1991b『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書VIII－小出I遺跡・小出II遺跡・小出III遺跡・小出IV遺跡－』

秋田県文化財調査報告書第206集

秋田県教育委員会1991c『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書X－上猪岡遺跡－』秋田県文化財調査報告書第208集

秋田県教育委員会1991d『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書XI－竹原窯跡－』秋田県文化財調査報告書第209集

秋田県教育委員会2001『盤若台遺跡一般国道7号琴丘能代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書VIII』

秋田県文化財調査報告書第319集

- 秋田県教育委員会2002『からむし岱I遺跡－大館能代空港アクセス道路整備事業発掘調査報告書－』
秋田県文化財調査報告書第339集
- 秋田県教育委員会2003a『前通遺跡－県営ほ場整備事業杉沢地区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書－』
秋田県文化財調査報告書第351集
- 秋田県教育委員会2003b『西野遺跡－日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書XVII－』
秋田県文化財調査報告書第360集
- 秋田県教育委員会2005『ムサ岱遺跡－一般国道7号琴丘能代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書XII－』
秋田県文化財調査報告書第396集
- 秋田県教育委員会2007『鴨巣館跡・鴨巣I遺跡・鴨巣II遺跡－一般国道7号琴丘能代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書IX－』秋田県文化財調査報告書第422集
- 秋田県教育委員会2008『地蔵岱遺跡－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書IX－』
秋田県文化財調査報告書第434集
- 秋田県教育委員会・秋田県教育庁払田柵跡調査事務所2005『払田柵跡調査事務所年報2004払田柵跡第125次～128次調査概要』
秋田県埋蔵文化財調査報告書第400集
- 秋田県教育委員会・秋田県教育庁払田柵跡調査事務所2006『払田柵跡調査事務所年報2005払田柵跡第129次～131次調査概要』
秋田県埋蔵文化財調査報告書第414集
- 秋田市教育委員会1986『秋田新都市開発整備事業関係埋蔵文化財発掘調査報告書－地蔵田B遺跡・台A遺跡・湯ノ沢I遺跡・湯ノ沢F遺跡－』
- 秋田市教育委員会1994『秋田新都市開発整備事業関係埋蔵文化財発掘調査報告書－地蔵田A遺跡－』
- 鹿角市教育委員会1998『特別史跡大湯環状列石発掘調査報告書(14)』鹿角市文化財調査資料61
- 鹿角市教育委員会2006『物見坂II遺跡(2)・物見坂I遺跡－中山間地域総合整備事業関連遺跡発掘調査報告書－』
鹿角市文化財調査資料86
- 五城目町教育委員会2002『防衛遺跡－湖東総合病院建設に伴う敷地造成工事に係る埋蔵文化財発掘調査報告書－』
五城目町埋蔵文化財発掘調査報告書第8集
- 小松正夫2004「秋田県の古墳概説」『出羽の古墳時代』川崎利夫編 高志書院
- 庄内昭男1984「秋田県における古代・中世の火葬墓」『秋田県立博物館研究報告第9号』秋田県立博物館
- 奈良修介・豊島昂1967『秋田県の考古学』吉川弘文館
- 沼山源喜治1985「東北北部の古代・中世墓について」『日高見國－菊池啓治郎学兄還暦記念論集－』菊池啓治郎学兄還暦記念能代市教育委員会2002『外荒巻館跡－土砂採取事業に伴う緊急発掘調査報告書－』能代市埋蔵文化財発掘調査報告書第13集
- 横手市教育委員会1984『オホン清水－第3次遺跡発掘調査報告書－』横手市文化財調査報告10